

北諸県地域の普及活動（普及活動月報）

令和8年3月

北諸県農林振興局

（北諸県農業改良普及センター）

目次

- I 管内の農業・農村の主な動き
- II 主な普及指導活動等の取組
 - 1 総合プロジェクトに関する普及活動
 - （1）北諸県地域を支える多様なアグリプレイヤーの確保・育成
 - （2）北諸県地域の持続可能な肉用牛産地づくり
 - （3）地域を牽引する集落営農法人の育成による収益性の高い北諸県農業の構築
 - （4）農地と水を活用した魅力ある大規模畑作経営体の育成
 - 2 専門プロジェクトに関する普及活動
 - （1）高い生産性を実現する施設きゅうり産地の育成
 - （2）生産者が描く未来ビジョンを達成できるいちご産地の育成
 - （3）産地ぐるみでブランド化に取り組むへべす産地の育成
- III プロジェクト以外の普及活動（一般活動）

北諸県地域の普及活動（普及活動月報）

令和8年3月

北諸県農林振興局

（北諸県農業改良普及センター）

I 管内の農業・農村の主な動き

（1）営農振興協議会園芸部会の開催

18日、普及センター研修室にて、今年度最後の園芸部会が開催され、関係機関・団体から25名が参加しました。

会では、これまでに実績を共有していなかった展示ほについての情報共有、来年度のみやざきブランド推進における地域本部の事業計画の検討、県外先進事例調査の報告等を行いました。

今年度はJAの営農指導体制が変わり、次年度は普及指導体制が変わることを受け、次回以降の開催方法を改めて見直すことにしています。



（園芸部会）

II 主な普及指導活動等の取組

1 総合プロジェクトに関する普及活動

（1）北諸県地域を支える多様なアグリプレイヤーの確保・育成

1）就農相談を実施

12件（肉用牛繁殖2件、肉用牛繁殖・養鶏1件、露地野菜2件、施設野菜3件、水稲3件、酪農1件）の就農相談があり、認定新規就農者制度や補助事業の説明を行いました。うち、施設野菜の1件については、県外からの移住を考えた相談で、農業技術習得のための研修制度や、補助事業等の支援策を説明しました。

今後も地域の大切な担い手につながるよう継続して支援していきます。

2）規就農者総合育成対策事業（経営開始型）の就農状況調査の実施

12、17日に、新規就農者総合育成対策事業（経営開始型）を受給している都城市管内の新規就農者を対象に市、JA、振興局、普及センターの各担当で現地調査を実施しました。調査では、現在の営農技術の習得状況や営農に対する意欲を本人から聞き取りするとともに、飼養管理状況や栽培状況の現地確認を行いました。

今後も農業者の伴走支援を行っていきます。



（就農状況調査）

3) 農業経営計画作成研修（第2回）の開催

11日、令和8年度の就農予定者等を対象として、農業経営計画作成研修を開催しました。

今回は、全4回のうちの第2回で、営農開始時に活用できる補助事業や制度資金についての解説のほか、肉用牛繁殖での就農を目指す方に対して、動態表の作成方法について研修を行いました。

普及センターでは、今後とも関係機関と連携して、就農を目指す皆さまの支援を行っていきます。



(農業経営計画作成研修会)

4) 農業経営研修会を開催

25日、新規就農者等を対象として、税理士の方を講師としてお招きし、農業経営研修会を開催しました。

当日は、新規就農者など18名が出席し、決算書の見方や良い経営を行うための考え方などについて学びました。また、出席者からは多数質問が出され、活発な意見交換がされていました。

出席者からは、経営計画を立てることの重要性に気づくことができたといった意見や農業経営に係る基本的な知識を習得できたといった意見が聞かれ、有意義な研修となったことがうかがえました。



(農業経営研修会)

5) 労働力マッチングアプリを活用した労働力確保対策の推進

普及センターでは、労働力確保対策の一環として、労働力マッチングアプリ活用マニュアルの作成をきゅうり生産者と連携して進めています。

3日、18日、24日に、この検討会を開催し、アルバイト募集までの準備やアプリでの募集方法等について検討を行いました。

今後、労働力不足が懸念されていますが、これらの取組を通じて、農業者が必要な時に必要な労働力を確保できるよう支援していきます。



(アプリ操作方法の確認)

(2) 北諸県地域の持続可能な肉用牛産地づくり

1) 子牛セリ市場での営農相談窓口設置

16日、子牛セリ市会場に、営農相談コーナーを設置しました。受付会場に訪れる生産者から母牛の給与内容について相談を受け、飼料分析と飼料設計についての重要性等を説明しました。また、子牛価格が前回以上に高騰したことで生産者からは、安堵の声が聞かれましたが肥育農家からは、頭数が揃えられない等、厳しいとの声が聞かれました。

今後も、農業者の多く集まる子牛セリ市で営農相談活動を行っていきます。

2) 関係機関（NOSAI）と連携した巡回指導

2、16、24日、NOSAIみやざきの獣医師と連携し、重点対象農家4件の巡回指導を行いました。

NOSAI獣医師による超音波装置を用いたフレッシュチェック（分娩後の卵巣等の機能回復確認）や妊娠鑑定等を行い、普及センターからは、イタリアンライグラスの適期収穫・調整について説明を行いました。

今後も関係機関一体となって、生産性向上に向けた支援を行っていきます。

3) イタリアンライグラス・エンバク展示圃の収量量査

26日、イタリアンライグラス・エンバク展示圃の収量調査を実施しました。生育期に雨量が少なく、生育の停滞が見られましたが、その後は、順調に生育し、草丈100cm程度、生草収量として、4~5ト/10aありました。収量調査の結果を基に良質粗飼料生産に向けた肥培管理指導を実施していきます。



(展示圃の様子)

(3) 地域を牽引する集落営農法人の育成による収益性の高い北諸県農業の構築

1) 集落営農法人によるキャベツ栽培の実績及び計画検討

23日、集落営農2法人と関係機関に加え、キャベツの出荷先であり一部作業を受託している大規模法人が参加し、今作の実績と次作の計画について検討しました。

今作の課題に対する具体的な協議もでき、有意義な検討会となりました。次作は9月頃に定植予定です。引き続き関係者で協力して支援します。



(協議の様子)

(4) 農地と水を活用した魅力ある大規模畑作経営体の育成

1) 畑かん営農推進に向けた担当者会の開催

18日に今年度最後となる担当者会を開催し、散水器具の導入計画及び推進状況等について共有しました。また、1年間の実績や取組状況を改めて確認するとともに、次年度の取組計画について協議しました。

今後も関係機関で協力しながら、畑かん営農の推進に取り組みます。

2) JAみやざき都城地区本部農業まつりでの畑かんPR活動

28、29日に行われた農業まつりで畑かんのブースを設置し、PR活動を行いました。

畑かんに関するクイズを行ったり、散水器具を展示したりしましたが、畑かんという言葉を知ったという方も多く、幅広いPRができました。

今後も畑かんを知ってもらうため、積極的にPR活動を実施していきます。



(活動の様子)

3) かんしょ苗床調査

中旬～下旬にかけて、JAみやざき都城地区本部焼酎原料用甘藷部会員を対象に農協指導員と苗床の巡回を行いました。

R7年産と比べR8年産は基腐病や茎根腐細菌病による目立った被害は少なく、順調な生育が見られています。

今後は本ほ調査を実施し、経過を観察していく予定です。



(苗床の様子)

4) かんしょ機械定植

26日、管内で機械定植に取り組む生産者の定植状況の確認を行いました。

機械定植の課題として定植ミスが発生する点が挙げられていましたが、苗に工夫を施すことで、定植成功率の向上が確認できました。

定植時間も大幅に短縮することができおり、今後の定植作業の省力化が期待されます。



(定植の様子)

2 専門プロジェクトに関する普及活動

(1) 高い生産性を実現する施設きゅうり産地の育成

1) 調査研究「きゅうりにおけるデータを活用した生産者支援方法の検討」の実施

9日、きゅうりの共同調査研究の室内及び現地検討会が開催され、普及センター、試験場野菜部、施設野菜専技から13名が参加しました。

午前中は、各地域におけるウィークリーレポートを活用した生産者支援の状況を確認し、今後の指導内容の充実に向けて意見交換を行いました。



(室内検討)

午後からは、先月まで栽培コンサルタントによる指導を受けていた都城市のきゅうり生産者2戸のほ場において、生育状況を確認しながら意見交換を行いました。両ほ場とも、コンサルの助言を踏まえて日射量に応じた摘果を取り入れたことで、収量の山谷が少なく、安定した生育につながっていることが確認できました。

データに基づく生産者支援の今後の方向性を確認する良い機会となりました。

2) 病虫害防除研修会の開催

13日、普及センター研修室にて標記研修会が開催され、きゅうり部会員、JA、普及センターから約30名が参加しました。

講師の専技センター長からは、特に3月は病虫害の発生や草勢低下が起こりやすく、その後の生育や収量に大きく影響することから、施肥・かん水・防除を遅れないように実施する重要性が示されました。

生産者からは、昆虫寄生菌の上手な使い方や、散布ムラを抑える農薬のかけ方等について具体的な質問が出され、意識向上が図られました。

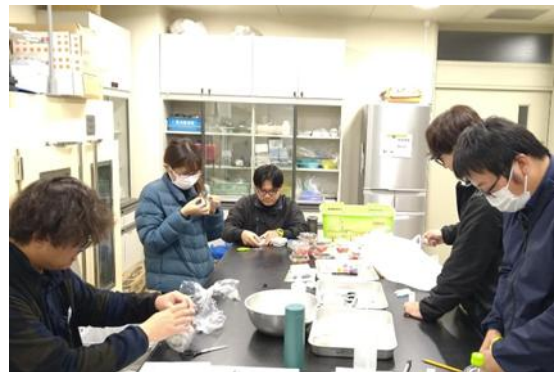
(2) 生産者が描く未来ビジョンを達成できるいちご産地の育成

1) JAみやざき都城地区本部いちご専門部会 糖度・硝酸イオン濃度測定の実施

19日、普及センターで部会員全戸の果実糖度の測定と、葉柄搾汁液の硝酸イオン濃度測定によるリアルタイム生育診断を行いました。

12～3月までの硝酸イオン濃度は低い傾向でしたが、月別平均糖度は令和4年度以降の全ての月を上回っていました。

今年度の12～2月が平年比120%と日照時間に恵まれ、また2月中旬まで気温が比較的低温となり、じっくり完熟できたと考えられます。



(糖度・硝酸イオン濃度測定)

(3) 産地ぐるみでブランド化に取り組むへべす産地の育成

1) JA みやざき都城地区本部へべす生産部会 巡回型現地検討会の実施

6日および9日、JA 及び都城市の果樹担当、県果樹専技と JA へべす生産部会の生産者の園地を巡回し、部会員個別に現地検討会を行いました。

3月時点で、程度の差はあるものの多くの園地が剪定を終えていました。しかし、成木で結果枝の切り返しをしまったり間引き剪定が不十分なものも散見されたため、結果量を増やすための剪定方法を助言しました。また、昨年展示ほで取り組んだ残効性の高い銅水和剤を利用した防除省力化の試験結果について情報共有しました。

当地区では寒さが強く、毎年4月頭まで発芽が見られませんが、今年は日照時間が長く高温が想定され、春枝の発芽時期や開花時期のバラツキが懸念されます。



(幼木の管理の助言)



(剪定指導)

2) へべす栽培における剪定作業の省力化に向けた展示ほの調査を実施

11日、安久町及び庄内町の展示ほについて、調査を実施しました。

剪定の省力化を目的として、先月16日に慣行の剪定とトリマーを使用した剪定を実施していますが、この剪定後の樹容積の計測や写真撮影を行いました。

調査時点ではまだ芽は動いていませんでしたが、次年度には着花量や着果量、夏枝伸長後の樹容積等を調査し、作業性と収量を見て効果を検証していく予定です。



(樹冠(南北)を計測)



(写真撮影)



(樹高計測)

Ⅲ プロジェクト以外の普及活動（一般活動）

（1）土地利用型スマート農業実証（大豆）及び大豆品種変更へ向けての検討会の開催

11日に管内大豆生産者、関係機関を参集し、実証内容の実績と品種切替に向けての比較試験の結果を報告しました。

実証結果については、次年度に向けて除草剤を活用した除草体系や狭畝栽培などの取り組みを共有でき、品種切り替えに向けてスケジュール感を持った取り組みを確認しました。



（検討会の様子）

（2）JAみやざき都城地区本部夏秋ピーマン専門部会 令和7年産実績検討会

2日、レストラン朝霧にて、生産者5戸が参加し、標記検討会が開催されました。

令和7年産の生産販売実績及び令和8年産の品種構成について、JAから説明がありました。

普及センターからは高温対策について対策技術を説明するとともに、植物体を健全に保つことが大前提であり土壌分析も重要と説明、また今年度視察で得た知見をもとに行った品種見直しに触れたり、かん水管理を見直したことで尻腐れ果が減少した生産者にコメントしてもらったりしました。具体的な説明や取りかかりやすい内容を話したことで、皆、活発に意見を交わし、次作に向けた意欲を高めた様子でした。

（3）JAみやざき都城地区本部きんかん生産部会 剪定講習会

30日、JAみやざき都城地区本部きんかん生産部会4戸が完熟きんかんの剪定講習会に参加し、剪定方法をJAと実演しながら検討しました。

昨年に続く高温期の早進化を原因とした、園内の開花時期のばらつきが各地で問題となっており、蒸し込みによる発芽揃えや新梢発生抑制効果のあるターム水溶剤の使用適期、ハダニ及びカイガラムシ対策について、部会員と活発に話し合いました。

部会員からは「展示ほど良い結果があったターム水溶剤は、夏秋梢身長抑制や肥大促進のためにも積極的に使っていきたい」と前向きな意見が出ました。



（剪定方法の目揃え）



（若手JA指導員にも剪定を指導）

(4) JA みやざきマンゴー部会 巡回の実施

5日、マンゴー部会員の園地を巡回しました。生育遅れで後期出荷になった園地は、3月下旬までに満開を迎えており、7月上旬頃に出荷開始となる見込みです。

近年の気象条件では秋口が高温となるため、遮熱資材とヒートポンプを組み合わせた管理を行うなど二重三重の対策を要します。高温対策技術の費用対効果を含め説明を行っています。



(2月中旬満開の幼果期)



(高温で出蕾の進みが遅れた園地の状況)